

学生寮建設に伴う

# 小若江遺跡第2次発掘調査報告書

2002.3

財団法人東大阪市文化財協会

学生寮建設に伴う

# 小若江遺跡第2次発掘調査報告書

2002.3

財団法人東大阪市文化財協会

## 目次

I.はじめに .....	2
II.調査の方法 .....	3
III.層序 .....	3
IV.遺構と遺物 .....	5
V.まとめ .....	20
VI.参考文献 .....	21

## 例言

- 1.本書は、平成10年度に財団法人東大阪市文化財協会（以下協会）が、栄和商事有限会社からの委託を受けて実施した、学生寮建設工事に伴う小岩江遺跡第2次発掘調査の結果報告である。
- 2.現地調査は、平成10年6月3日から平成10年8月5日まで実施した。
- 3.調査は、池崎智詞が担当した。現地調査には、調査補助員として梶浦泰久・山村然三・西村和広らが参加し、本書作成には、梶浦泰久・山村然三・西村和広・糸島慎也・根来磨由美らが参加した。
- 4.本書は池崎智詞が執筆編集した。
- 5.本書の遺構写真および遺物写真の撮影は池崎が行った。
- 6.調査地の基準点測量は、株式会社ワールドに委託して行った。
- 7.現地調査に際して、栄和商事有限会社取締役大儀和子氏および、有限会社高田工務店に御協力頂いた。記して御礼申し上げます。
- 8.今回掲載した遺構平面図・断面図のトレース作業は、すべてコンピュータ上で行つた。



図1 小若江遺跡周辺の遺跡分布図

## Iはじめに

小若江遺跡は、近畿大学附属高等学校を中心に広がる弥生時代後期から古墳時代初頭の遺跡として知られる。

昭和15年近畿大学（当時は日本大学大阪専門学院）構内のグラウンド整備工事に際して多くの遺物が発見され、大阪府教育委員会（以下府教委）と京都大学文学部考古学研究室によって調査が行われたことにより周知されるようになった。

このときの調査地点であった、構内南東隅の南北2つの池については、北方を小若江北遺跡（以下北遺跡）、南方を小若江南遺跡（以下南遺跡）と命名された。両遺跡からは、とともに弥生土器のほか、土師器・須恵器等の遺物が出土した。特に古墳時代初頭の上師器について、北遺跡出土のものを「小若江式」、南遺跡出土のものを「小若江II式」として、他の遺跡出土資料との比較資料として使用されたことから、学術的にも周知されるようになった。

過去近畿大学が数回の発掘調査を行っているが、中でも5次調査では、中～近世の遺構・遺物を検出し、弥生時代から中～近世にいたる、複合遺跡であることがわかった。

東大阪市では昭和62年に調査を行って以来2回目の調査となる。

今回の調査地点は遺跡範囲の西端部にあたり、近鉄大阪線長瀬駅から東に約600m、近畿大学からは正門より西に150mに位置し、地籍では小若江町2丁目167番地28にあたる。

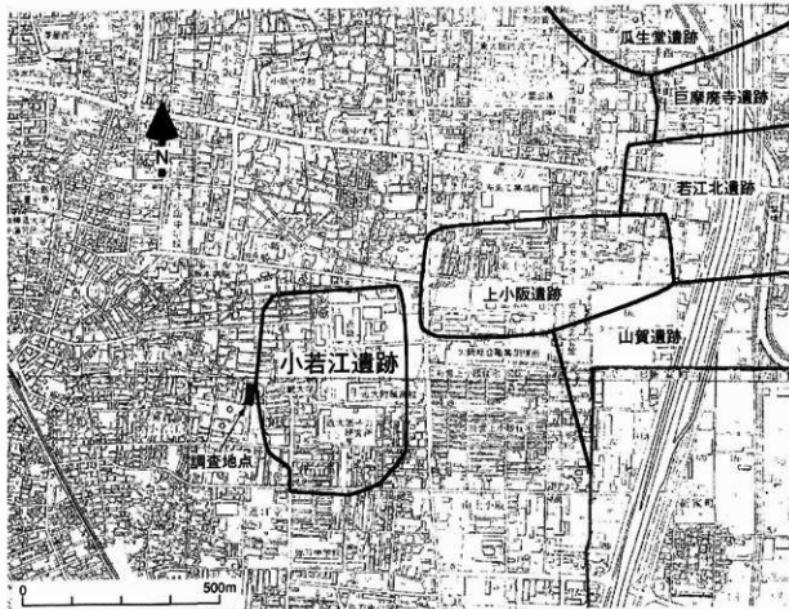


図2 小若江遺跡位置図

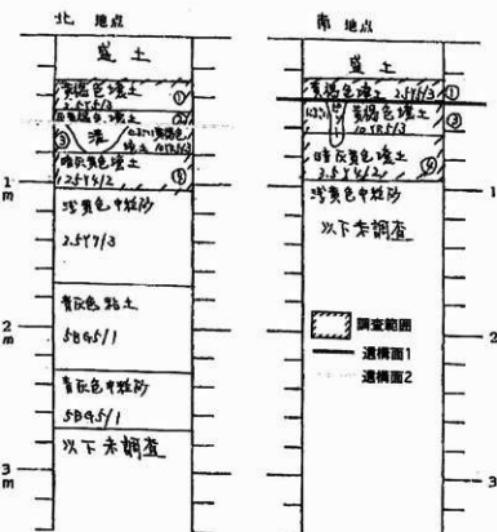


図3 試掘調査データ  
遺構面のライン以外は、調査に際して使用されたものを出力しており、一切の加筆修正は行っていない。

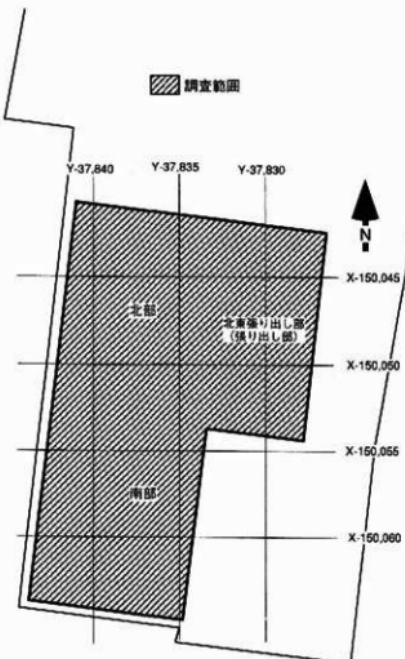


図4 トレンチ位置図

地形的に見ると、調査地点は標高5mにあり、西700mには現在の長瀬川（以下長瀬川）が蛇行して北流する。長瀬川から中央環状線付近には、南から佐堂・美園・友井東・山賀遺跡が、また遺跡の北東には上小阪・若江北・巨摩庵寺・瓜生堂・若江遺跡など大規模な遺跡が分布する。以前拙著<sup>(1)</sup>においてそのほとんどが、長瀬川を含めた旧大和川の分流路が埋没・形成した高まりの上に発達した謂五郷続ることを航空写真などから判読した。

近畿大学の調査や今回の調査においても、河川堆積物である厚い砂層の堆積が確認されていてからも、小若江遺跡の地形形成において、旧大和川の分流路の活動が起因した遺跡であることがわかる。

(1) 池崎智悟「大畑遺跡の周辺環境」『共同住宅建設工事に伴う大畑遺跡第1次発掘調査報告』2001 財团法人東大阪市文化財協会

## II. 調査の方法

平成10年度に東大阪市教育委員会文化財課（以下市教委）の行った試掘調査によって、現地表面下0.25m以下の部分より1面の遺構面と2つの遺物包含層が確認された。（図3参照）

原因者との協議の結果、建設予定地内で建物（学生寮）建設で破壊される部分277.9m<sup>2</sup>について、発掘調査を行うことになった。

盛り土部分である現地表面から0.25mまでは重機による掘削を行い、以下1.05mまでについて人力による掘削を行った。

トレンチは便宜上大きく「北部」と「南部」に分けており、北東部分の張り出しを「張り出し部」と呼ぶ。（図4参照）

## III. 層序

今回の調査地内での層序は以下の通りである。

1. 盛り土
2. 10YR3/2 黒褐色粗砂混粘質シルト（近世以降の耕作土）

3. 10YR4/4 褐色砂質シルト（荒砂混じる） 第1面ベースおよび第2面直上の包含層

4. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト 第2面ベースおよび第3面直上の包含層

5. 7.5YR4/1 褐灰色シルト混細砂 第3面ベースおよび第4面直上の包含層

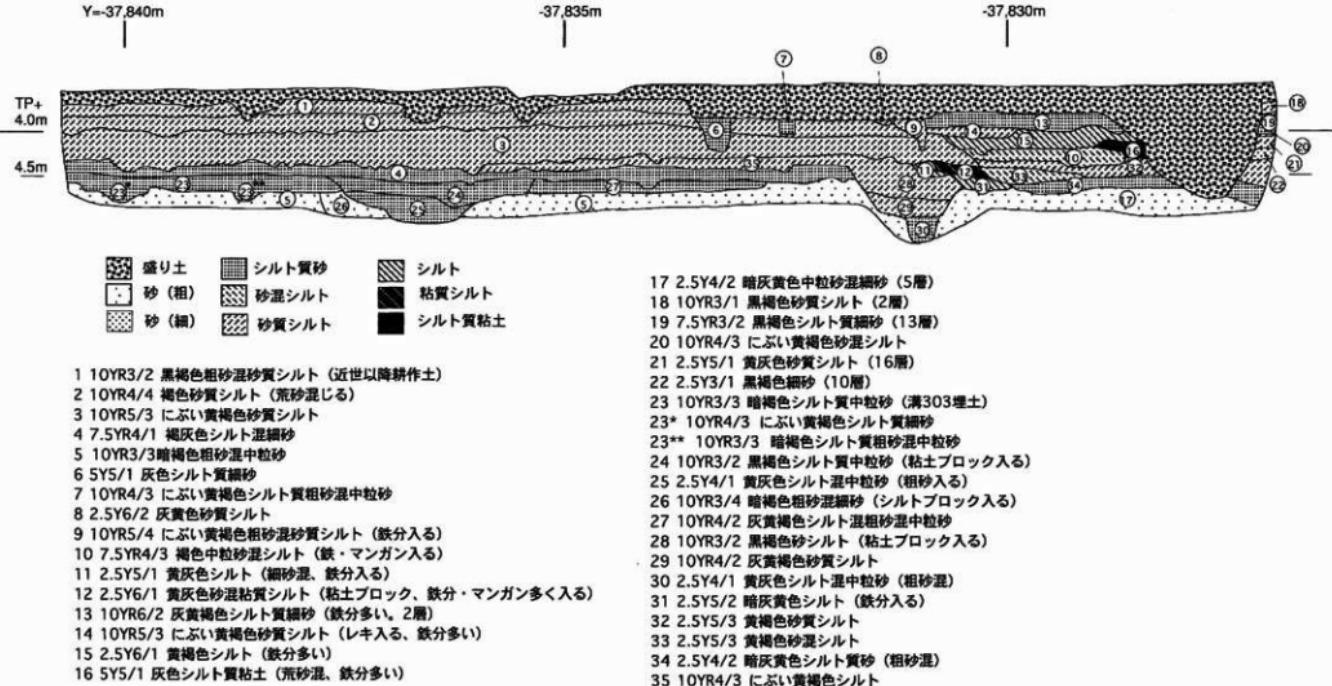


図5 トレンチ北壁断面図



図6 北壁断面 南西から



図7 調査風景 北から

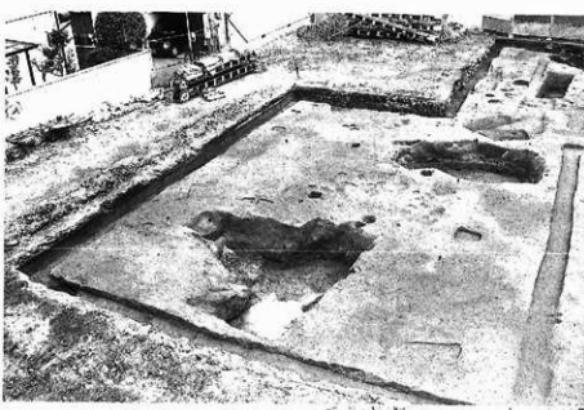


図8 第1面東半遺構検出状況  
北から

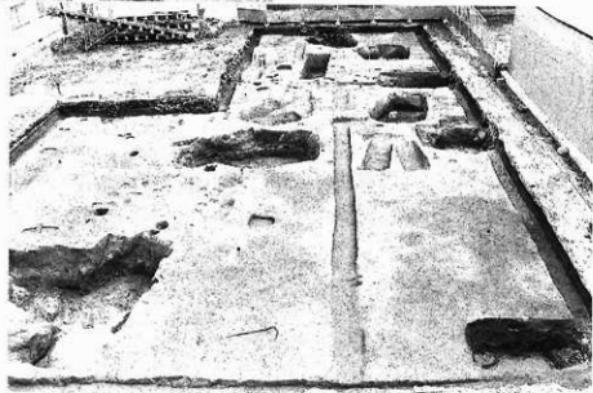


図9 第1面遺構検出状況全景  
北から

6.10YR3/3暗褐色粗砂～中粒砂  
第4面ベース  
7.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土  
(マンガン混じる)

#### IV. 遺構と遺物

今回の調査では、4面の遺構面とそれに伴う遺物包含層から多くの遺物を検出した。以下に各遺構面の成果について述べる。

##### IV.1. 第1面

盛り土の下、TP+4.2m付近でスキ溝などの耕作痕跡のほか、多くのピットを検出した。

上面を削平されており、残存状態

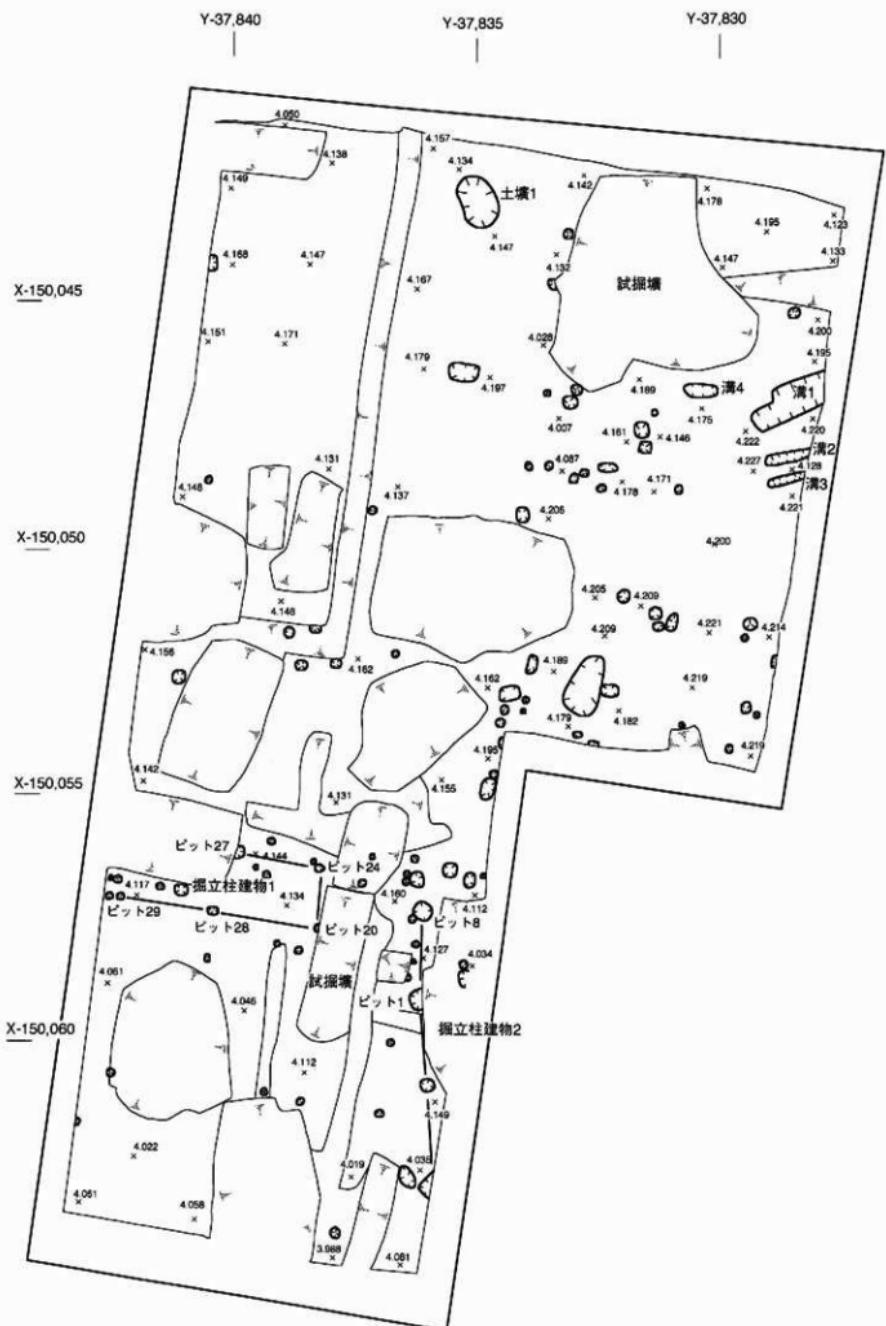


図 10 第1面構造平面図



図11 第1面検出掘立柱建物全景

東から

スケール右上がピット8

溝3はトレンチ北東部、溝2の0.3m南を並走する東西溝である。溝1同様  
本来の規模は不明である。

検出規模は、長さ0.7m、幅0.2m、深さ0.06m。

溝4

は非常に悪かった。

溝1

溝1は、トレンチ北東部に位置する北東-南西方向の溝である。西端部は削平によって消滅しており、東端部はトレンチ外方に広がるため、本来の規模は不明である。

検出規模は、長さ1.7m、幅0.7m、深さ0.07m。

溝2

溝2はトレンチ北東部、溝1の南に位置する東西溝である。溝1同様、本来の長さは不明である。検出規模は、長さ1m、幅0.2m、深さ0.09m。

溝3

溝4はトレンチの北東部、溝1の北西に位置する東西溝の残骸である。溝の東西両端は、上面の削平によって消滅する。検出規模は、長さ0.7m、幅0.3m、深さ0.02m。

ピット

ピットは、張り出し部および南部に顕著で、北西部にはほとんど認められない。また検出したピットの数は多いが、建物として組み合わせが明らかなものは少ない。

ピットは、遺構内の堆積土の違いから、大きく2つに分けることができるが、その詳細な時期差を判別できる遺物の出土はない。



図12 第2面東半全景 北から

図13 第2面全景 北から

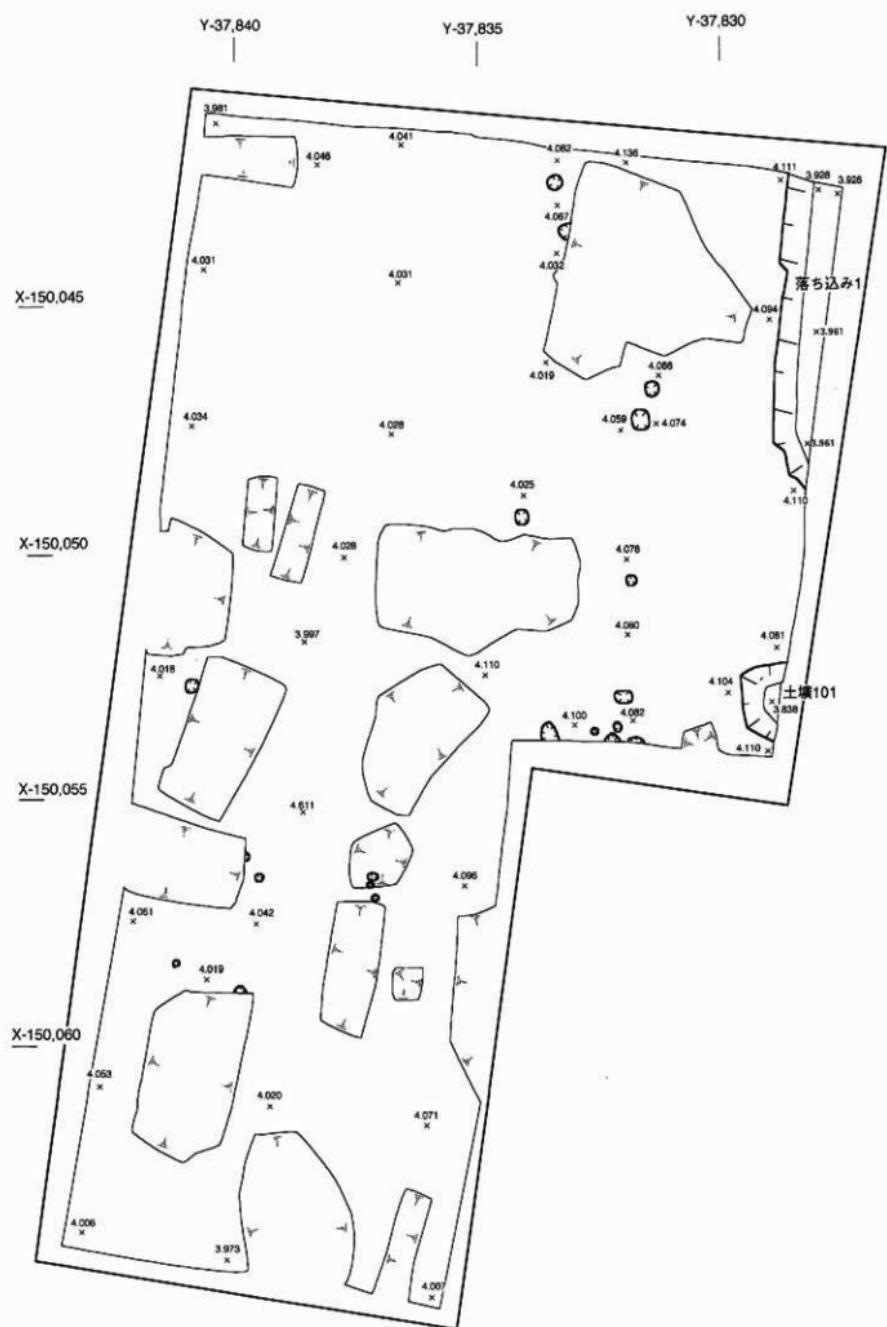


図 14 第2面遺構平面図 8



図15 落ち込み1検出状況  
北から スケールは2m

南部で掘立柱建物2棟を検出した。

#### 掘立柱建物1

ピット27・24・20・28・29で構成される建物は、南部の西半に位置し、南北1間×東西2間分を検出した。柱間は芯で南北1.4m、東西1.8mを測る。

#### 掘立柱建物2

ピット1・8を含む建物は、南部東半に位置する。南北に3間分を検出し、柱間は芯で1.8mを測る。

東に広がると考えられるが、柱列よりトレンチ東端までは、攪乱で削られ不明である。

掘立柱建物を構成するピットからは、ほとんど遺物が出土せず、時期などについての詳細は不明である。ただ、建物1と建物2では、ピットの規模や方位に若干の違いが見られることから、それを時期差とすることは可能である。

この造構面は、各造構からほとんど遺物の出土がないことから時期の決定が困難であるが、凡そ近代以降現代以前と考えられる。

## IV.2. 第2面

TP+4m付近で検出した造構面である。

上面は削平を受けており、検出面が造構の掘込み面ではない。南端部および北西部に造構は認められない。

#### ピット

ピットは、概ね直径16cm～30cmの不整円形を呈する。

建物として復元できる組み合わせはない。

各ピットから器形や時期などがわかる遺物はほとんどない。

張り出し部の北東隅で落ち込みを南部では土壙を検出した。



図17 第3面全景 北から

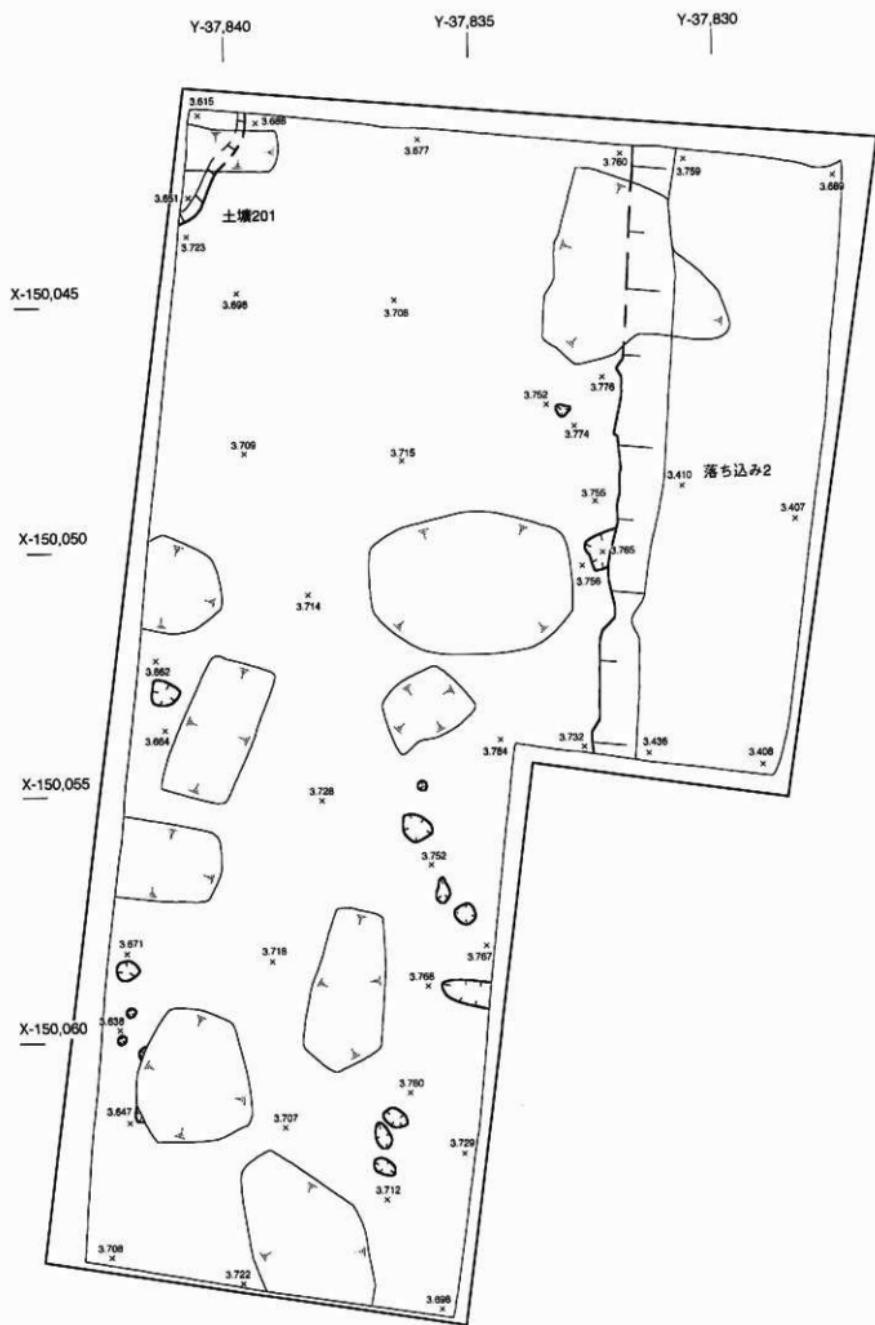


図 18 第3面造構平面図 10



図19 落ち込み2中央南断面



図20 落ち込み2全景  
南から

図21 落ち込み2出土遺物 土師器



#### 落ち込み1

落ち込み1は、南北両端部および東側がトレンチ外方へ広がることから、本来の規模は不明である。検出した規模は、長さ6.5m、幅1.5m、深さ0.2mを量する。遺物は瓦器・土師器・須恵器などの細片が出土した。

#### 土壇

土壇101は張り出し部南東端に位置する。東半分がトレンチ外方に広がるため、本来の規模は不明である。検出規模は、直径1.6mの不整形で、深さは0.27mを量する。遺物は染め付け・瓦器柄・土師器皿などの細片が出土した。

この面の時期については、第1面の下層にあることや、ベースの堆積層に含まれる遺物の年代観から考えると、近世後半以降近代以前に埋没したものと考えられる。



図22 落ち込み2出土遺物 その2

Y-37,840

Y-37,835

Y-37,830

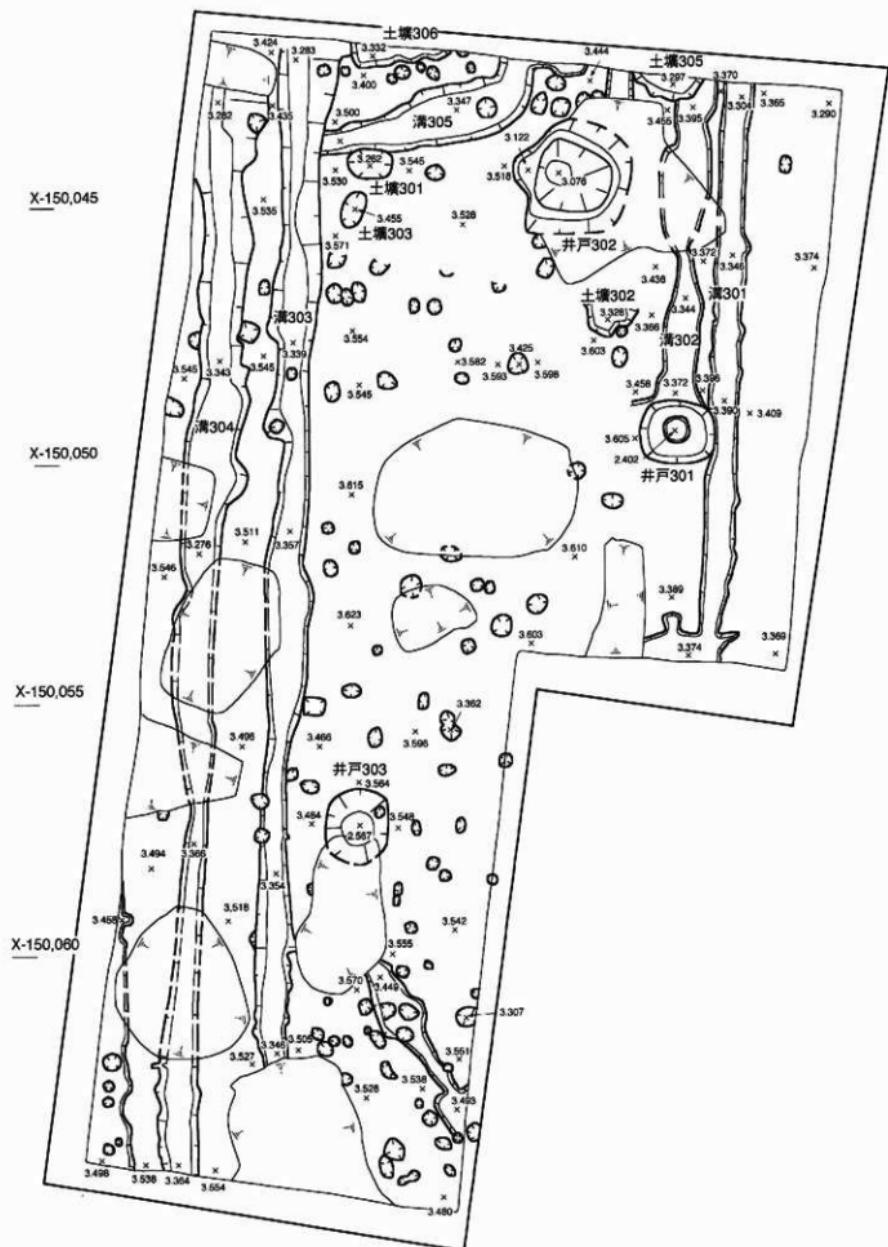


図23 第4面造構平面図 12



図24 第4面全景 北から

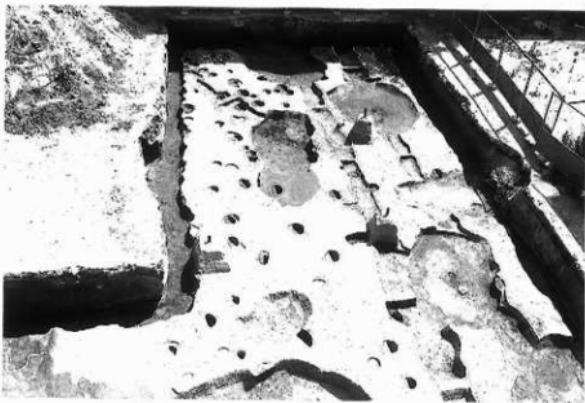


図25 第4面南部遺構検出状況  
北から (右上)



図26 井戸301断ち割り状況  
南から

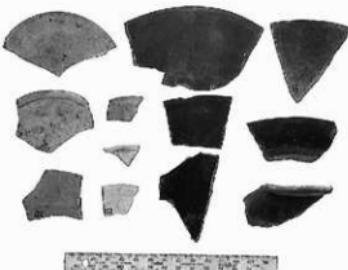


図27 井戸301出土遺物

#### IV.3. 第3面

TP+3.7m付近で検出した遺構面である。

張り出し部東側には東に傾斜する落ち込みを検出した。

落ち込み2

落ち込み2は、南北両端部がトレンチ外方に広がることから本来の規模は不明である。また今回の調査範囲では、遺構の東半部がトレンチ外方に広がるため、遺構本体の形状は不明で、溝とも考えられるが、今回は落ち込みとした。

検出規模は、南北12.5m、東西4.5m、深さ0.35mを呈する。遺物は染め付け碗、唐津・瀬戸の茶碗、備前播鉢・青磁・白磁の壺や碗の他、瓦器碗、土師器皿・壺などが出土した。(図21・22)

遺物の特徴を見ると近世の陶磁器とともに、11世紀後半の遺物も多く、種類・時期ともにバリエーションが豊富である。古手の遺物については、落ち込みを埋めて整地した際に混入したものと考えられる。

Y-37,830  
X-150,050  
+

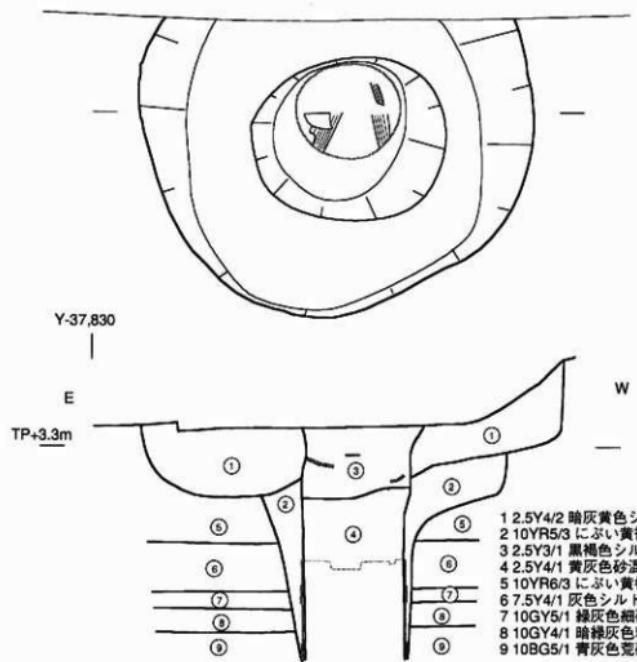


図28 井戸301平・断面実測図



図29 井戸302断ち割り状況  
東から

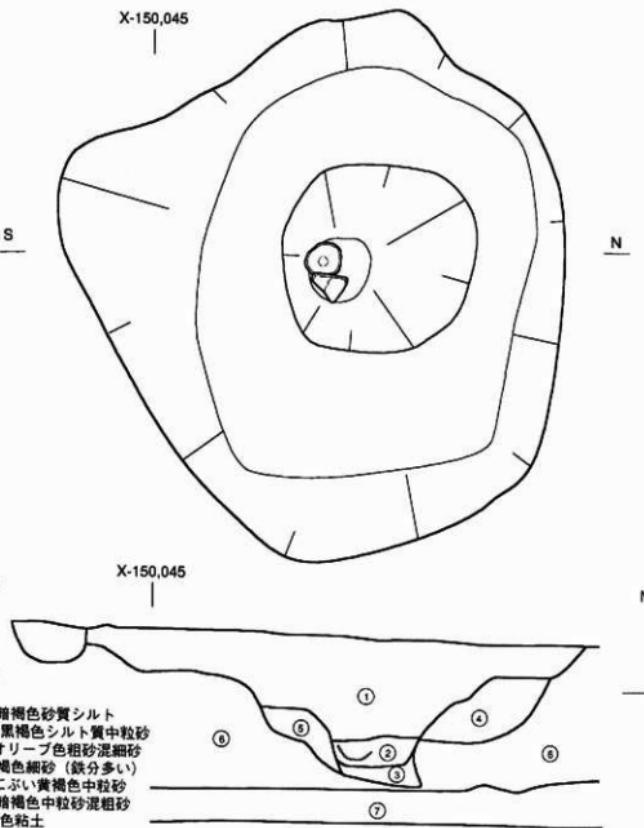


図30 井戸302 平・断面図



図32 井戸302 出土遺物 黒色土器



図31 井戸302 出土遺物 土師器皿



図33 井戸302出土遺物  
黒色土器 表・裏面

#### IV.4. 第4面

TP+3.5m付近で検出した遺構面である。

井戸は3基検出した。

井戸1

井戸1は張り出し部中央部分に位置し、上部の掘方は南北1.2m、東西1.5m



図34 井戸303断ち割り状況 南から

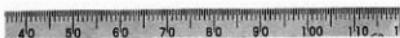


図35 井戸303出土遺物 土師器皿

の梢円形を呈する。下部は直径0.5mの円形を呈し、井戸側として曲物を使用する。

曲物は、高さ0.35m、直径0.4mで上下に帯をもつ。

検出面からの深さは1.1mであるが、上面が削平を受けていることから、本来の規模は不明である。検出時に上部では井戸側の存在は認められなかつたが、断面による堆積土の観察からは、曲物を埋め戻した堆積土が、曲物が存在しない上方にも続くことから、あと1・2段の井戸側の存在が考えられる。

遺物は、瓦器椀、土師器皿・羽釜などの細片が出土した。(図27)

この井戸は出土遺物から12世紀後半以降に埋没したと考えられる。

#### 井戸2

井戸2は張り出し部北側に位置し、東半分を試掘坑に削られる。上部の掘り方は、一辺約2.3mの隅丸方形を呈する。検出面より0.25m下の部分からは直径0.4mの不整円形に掘り下げる。

検出時には井戸側は認められなかつた。

深さは、検出面より0.62mを測るが、上面が削平されていることから本来の規模は不明である。

遺物は、土師器皿(図31)の他、口縁端部が若干欠損するもの、ほぼ完形の黒色上器椀が2個体出土した(図32・33)。

黒色上器は、外面を4分割のヘラミガキ・内面は細かい畠文を有するもので、2個体ともに口径15.2cm、器高5.3cm。遺物の時期から11世紀後半以降に埋没したものと考えられる。

#### 井戸3

井戸3は、トレンチ南部中央に位置し、南北1.5m、東西1.3mの梢円形の掘方を呈する。深さは、検出面から1.3mを測るが、上面が削平されていることから、本来の規模は不明である。

検出時に井戸側は認められなかつた。井戸内の堆積土層の観察からは、比較的短時間で埋没した様相を呈する。

遺物はほとんどなく、土師器皿細片(図35)が出土した。遺

図36 溝301出土遺物

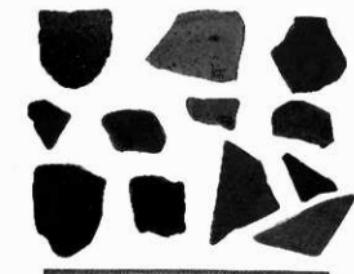
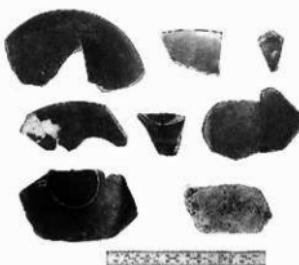


図37 溝302出土遺物



図38 溝303・溝304検出状況  
北から



物が少なく時期の決定は困難であるが、おおよそ11世紀後半以降に埋没したものと考えられる。

図39 溝303出土遺物  
瓦器・砥石（左上）

図40 溝303出土遺物  
土師器（右上）

#### 溝

溝は主に南北方向の溝で、トレンチの東西両辺で検出した。

#### 溝301

溝301は、張り出し部中央に位置し、検出規模が幅0.7m、長さ12.6mを測る南北溝である。溝の南北両端部は、トレンチ外方に広がることから、本来の規模は不明である。ほぼ南北座標軸にのる方位を呈する。深さは0.04m。遺物は弥生土器甕・製塗土器のほか黒色土器椀・土師器皿が出土した（図36）。図41 溝304出土遺物  
土師器

#### 溝302

溝302は、張り出し部中央で溝301の西側に隣接し、検出規模が幅0.9m、長さ7.6mを測る南北溝である。南端部は井戸301以南には延びず、北端部はトレンチ北外方に広がることから、本来の規模は不明である。深さは0.06m。北端部分では土壌305に削られる。ほぼ南北座標軸にのる方位を呈する。遺物は瓦器椀・黒色土器椀・土師器皿などが出土した（図37）。遺物から12世紀後半以降に埋没したものと考えられる。

#### 溝303

溝303は、トレンチの西部に位置し、検出規模が



図42 溝304出土遺物 瓦器 A面

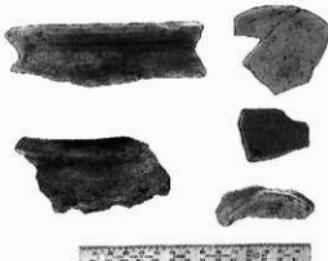


図43 溝304出土遺物 瓦器 B面

幅 0.65m、長さ 21.4m を測る南北溝である。

溝の北端部はトレンチの外方へ広がり、南端部は搅乱で削られたことから本来の規模は不明である。深さは 0.16m。ほぼ南北座標軸にのる方位を呈する。遺物は土師器皿・甕・羽釜・壺、瓦器椀のほか、砂岩製の砥石が出土した(図 39・40)。遺物から 12 世紀前半以降に埋没したものと考えられる。

#### 溝 304

溝 304 はトレンチの西部、溝 303 の西に隣接し、検出規模が幅 0.79m、長さ 24.3m を測る南北溝である。溝の南端部はトレンチの外方へ広がり、北端部は搅乱で削られたことから本来の規模は不明である。深さは 0.15m。ほぼ南北座標軸にのる方位を呈する。遺物は瓦器椀、土師器、須恵器などが出土した(図 41～43)。出土遺物の特徴から 12 世紀後半以降に埋没したものと考えられる。

#### 溝 305

溝 305 はトレンチ中央北端部分に位置し、北から南西に偏平な「丁字」形を呈する溝である。北端部はトレンチの外方へ広がり、西端部は溝 303 に切られることから、本来の規模は不明である。検出規模は、長さ 4.7m、幅 1.2m を測る。深さは 0.15m。遺物は黒色土器椀、須恵器、土師器などが出土した。

図 44 ピット 312 出土遺物

溝 303 に切られることや遺物の時期から、11 世紀後半以降 12 世紀前半の間に埋没したものと考えられる。

#### 上塙

#### 土塙 1

土塙 1 はトレンチ北部西より、溝 305 の南肩を若干削る位置にある。南北 0.6m、東西 0.9m の楕円形を呈し、深さは 0.28m。

遺物は黒色土器椀、土師器皿、須恵器などが出土した。遺物から、11 世紀後半以降に埋没したものと考えられる。

#### 上塙 2

土塙 2 は張り出し部中央西よりに位置する。直径 1m の不整円形を呈する。

図 45 トレンチ北部

最終断ち割り断面 南から



図 46 第 4 面下層の砂層出土遺物

遺物の出土はない。

#### 土壙3

土壙3はトレンチ北部西よりで土壙301の南に隣接する。南北0.8m、東西0.5mの横円形を呈し、深さは0.11m。遺物は黒色土器椀、土師器などが出土した。遺物から11世紀後半以降に埋没したものと考えられる。

#### ピット

ピットは張り出し部にはほとんど見られず、北部・南部に顕著である。数は比較的多く検出したが、建物に復元できるものはない。

また、ほかの造構との切り合い関係などから、複数の時期のピットが存在するが、造構内からの出土遺物が少なく、ピット間の時期差の詳細は不明である。

## V.まとめ

調査全体を通して、近畿大学の調査などで明らかにされている古墳時代初頭の遺物は、包含層や造構内から他の時期の遺物と混在して出土しているにすぎない。また最終確認の断ち割りで、第4面の下層にある砂層から弥生土器甌、土師器皿・甌・鉢、須恵器壊身・甌などの遺物（図46）を検出したことから、平安時代以前の造構の西への広がりは示唆されるが、今回の調査では当該期の造構を面として捉えることができず、遺跡範囲の西へ広がりについて確認できたとは言えない。しかし、平安時代から近世にかけての造構・遺物が多く出土したことにより、平安時代以降には調査地以西の部分を含む大きな範囲で集落が発達していたことが明らかになった。特に平安時代後半から鎌倉時代前半の造構のあり方は、近接した場所に居住域の存在を示唆しており、周辺の調査成果の増加が待たれる。

同時に、中世以降近世にかけて、整地を含めた大規模な土地の改変が行われたことが明らかになったことから、中世以降の土地利用のあり方についても、検討材料の一つとして提供できたのではないかと思う。

今回の調査では、これまで不明な点が多かった古墳時代以降（特に平安時代以降）について、造構・遺物を確認し、周知されている時期以外にも人々の活動が盛んであったことが明らかになった。しかし小若江遺跡の性格については不明な点が多い。また從来から知られているはずの古墳時代初頭の時期についても、西への広がりや集落本体の場所（居住域）や生産域・墓域など、明らかにしなければならない点が多い。

小若江遺跡の性格を解明するにはさらなる調査成果の増加とともに、周辺遺跡との関連を含めた広い視野のもとでの検討が必要であろうと思われる。

## VI. 参考文献

- 近畿大学文化会考古学研究会「小若江遺跡 - 近畿大学構内発掘調査報告書 -」1986 近畿大学小若江遺跡調査運営委員会  
藤田義成「小若江遺跡第5次調査」「埋蔵文化財報告書 小若江遺跡（第5次調査）山賀遺跡（第4次）」1991 学校法人近畿大学  
小森俊寛・上村薰草「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』1996 財団法人京都市埋蔵文化財研究所  
池崎智詞「2 美園遺跡の周辺環境」『共同住宅建設工事に伴う美園遺跡第1次発掘調査報告』2001 財団法人東大阪市文化財協会

## 抄録

---

書名 学生寮建設に伴う小岩江遺跡第2次発掘調査報告書  
ふりがな がくせいり ょうけんせつにともなうこわかえいせきだい2  
じはっくつちょうさほうこくしょ

著者名 池崎智詞

編集機関 財団法人東大阪市文化財協会

郵便番号 577-0843

所在地 大阪府東大阪市荒川2-28-21

電話番号 06-6736 0346

発行機関 財団法人東大阪市文化財協会

発行年月日 2002.3.31

遺跡名 小岩江遺跡

遺跡名ふりがな こわかえ

遺跡所在地 東大阪市小岩江2丁目167番地28

所在地ふりがな ひがしおおさ かしこわかえ 2ちょうめ 167ばんち 28

市町村コード 27227

北緯 34 38 48.1

東経 135 35 14.5

調査期間 1998.06.03 ~ 1998.08.05

調査面積 277.9m<sup>2</sup>

調査原因 学生寮建設

種別

主な時代 平安時代中頃から鎌倉時代・近世

特記事項 12世紀後半の曲物を井戸側に使用した井戸  
11世紀後半のほぼ完形の黒色土器が出土した井戸

---

学生寮建設に伴う  
小若江遺跡第2次発掘調査報告書

2002年3月31日

発行 財団法人 東大阪市文化財協会

〒577-8043 東大阪市荒川3丁目28-21

電話 06-6736-0346

紙質 表紙 レザック 215kg・本文 ニューエイジ 90Kg

製本 無線綴じ

印刷 株近畿印刷センター